

<紛争の影響を受けた子どもたち> 「イエメンの人々の声を届け続けます」



ICAN 東京事務所
北島 美聡

イエメンの紛争が本格化した 2015 年 3 月から、約 3 年半が経ちますが、紛争の終わりは見えるどころか、悪化の一途をたどっています。6 月から激化した西海岸アル・ホデイダ州での戦闘を皮切りに、各地で戦闘が激しさを増し、8 月には大規模な空爆が 2 か所でありました。アル・ホデイダ州では 20 人以上の子どもが、北部サアダ州においては子どもたちが乗ったバスへの空爆で 55 人が犠牲となりました。こうした治安悪化や情勢不安は、物価高騰やイエメン通貨の暴落に拍車をかけ、人口の 3 分の 2 にあたる 1,780 万人が食糧不足に陥り、「世界最悪の人道危機」と呼ばれています。そのような中、アイキャンは、2015 年 12 月からイエメン国内において食糧提供を開始し、これまでに延べ 20 万人以上に食糧を提供してきました。最も困難な人々に希望を届けたいという思いから、戦闘が最も激しく、外部機関も入りづらい西海岸を中心に、食糧を届け続けています。

しかし、こうした紛争地での活動には、大きな困難がつきまといまいます。例えば、現在、イエメン全土での食糧不足や物価の高騰により、食糧を提供地近郊ではなく、首都サナアで購入し運搬を行うケースが増えていますが、運搬距離が長ければ、長いほど、強奪や脅迫されるリスク、トラックの車列を空爆されるされるリスクは拡大していきます。そのため、常に運搬ルートを探る必要があり、共に移動する担当者のもとより、首都サナアや日本の事務所においても緊張が漂います。さらに、提供の場所やタイミングに関しても、慎重にならざるを得ません。多くの人が集まるということは、空爆のリスクのみならず、集まる人の中での争いのリスクも高めることとなります。そのため、事前の行政や治安担当部局との調整や公平な提供基準の遵守・公表が必須となります。人々は空爆に敏感になっているため、提供時に上空から飛行機の音が聞こえてくると、みんな緊張して、一目散に避難していきます。これがイエメンの日常なのです。



各国の NGO が次々と撤退していく中、アイキャンは 5 月から 8 月の 4 か月間、西海岸にあるハッジヤ州において食糧提供を実施してきました。ハッジヤ州に避難民として逃れてきた障がい児を持つお母さんは、「私たちは小枝で作られた小さな所に住んでいます。雨や太陽からも守られない、とても厳しい環境です。」と話し、寡婦家庭の年配の女性は「泥でできた家に住んでいて、生活状況も困窮しています。どうか食糧の提供を継続してほしい。」と涙ながらに訴えました。イエメンの人々のこうした声は、日本を含む世界へ届いていません。私たちは、この声が途切れないよう、最後までイエメンからのメッセージを届け続けていきます。

各国の NGO が次々と撤退していく中、アイキャンは 5 月から 8 月の 4 か月間、西海岸にあるハッジヤ州において食糧提供を実施してきました。ハッジヤ州に避難民として逃れてきた障がい児を持つお母さんは、「私たちは小枝で作られた小さな所に住んでいます。雨や太陽からも守られない、とても厳しい環境です。」と話し、寡婦家庭の年配の女性は「泥でできた家に住んでいて、生活状況も困窮しています。どうか食糧の提供を継続してほしい。」と涙ながらに訴えました。イエメンの人々のこうした声は、日本を含む世界へ届いていません。私たちは、この声が途切れないよう、最後までイエメンからのメッセージを届け続けていきます。

ごみ処分場周辺に住む子どもたち 8 月 30 日 / パヤタス(フィリピン)
次のステップへ向けてミーティングを開催



フェアトレード生産者団体 (SPNP) のお母さんたちは、この日、新規の販売場所開拓について話し合いを行いました。リーダーのビーナさんは、「私たちはアイキャンではなく、独立した団体。アイキャンは 1 つのパートナー

であり、SPNP の活動継続のためには自分たちで行動し、パートナーを見つけて行く必要がある。」と話し、新しいステップに向けて、少しずつですが、確実に取り組んでいます。

MY アイキャン事業 8 月 25 日 / 愛知
街頭募金のボランティア活動で感じた一体感



高校生・大学生・社会人の計 12 名のボランティアの方々が、フィリピンの路上の子どもたちのための街頭募金活動に参加しました。参加者からは、「今回活動に初めて参加して嬉しかったことは、同じボランテ

ィアとして参加した皆さんとの一体感を感じることができたこと。」との感想をいただきました。1 人 1 人が精いっぱい、フィリピンの子どもたちの現状を通行人の方々に伝えました。

紛争の影響を受けた子どもたち 8 月 / ホルホル・アリアデ(ジブチ)
2 つのキャンプにて新しい仲間を迎え入れました



8 月中旬、ジブチ南部にあるホルホル難民キャンプとアリアデ難民キャンプにおいて、ソマリアやエチオピアからの難民 6 名をアイキャンのスタッフとして迎え入れました。新しいスタッフたちは早速、家庭訪問や子どものデータ作成を進めています。両キャンプに暮らすソマリア・エチオピア・エリトリアからの難民の子どもたちへ、継続した「子どもの広場」を届けられるよう新しい仲間と共に活動を続けていきます。

両キャンプに暮らすソマリア・エチオピア・エリトリアからの難民の子どもたちへ、継続した「子どもの広場」を届けられるよう新しい仲間と共に活動を続けていきます。

国際理解教育事業 8 月 1 日 / 愛知
自分と世界とのつながり、できることを考えるための講演会



愛知県私立聖霊中学校の生徒 201 名に対し、講演会を実施し、フィリピンの路上の子どもたちの現状や NGO の活動、世界と自分のつながり等を伝えました。担当した先生は、「貧しくても夢や希望を持っている子どもたちの姿に感銘を受けた。ぜひ生徒のみんなにもこうなってほしいと願っている。またどうすれば彼らが平和な社会で生きていけるのかを考え、それを作り出す人材になってほしい。」と話しました。

ぜひ生徒のみんなにもこうなってほしいと願っている。またどうすれば彼らが平和な社会で生きていけるのかを考え、それを作り出す人材になってほしい。」と話しました。